Proceedings of the Ja Sakai Annual Conference
Vol.2012 No.6 2012/3/9

日本版 Sakai2.8 開発におけるユーザインターフェイス設計事例

The design example of a user interface in the development of japanese version Sakai2.8

豊田耕一
新日鉄ソリューションズ株式会社
社会公共ソリューション事業本部
文教統括グループ

あらまし：「日本の授業型学習に沿って、Sakai 利用スキルの浅い教員でも気軽に Sakai を活用して頂ける」を基本コンセプトに日本版 Sakai2.8 を開発中である。本報告では、基本コンセプト実現に向けたユーザインターフェイス設計の事例を紹介する。

キーワード：オープンソース CMS，Sakai，Ja Sakai，授業支援システム、クラウド、SaaS

1. はじめに

当社は Ja Sakai コミュニティに参画して活動をしており、2009 年からは関西大学の CEAS/Sakai 連携システム(1)の開発、運用を担当してきた。現在、更に日本での Sakai 普及を目指して、社内にて Sakai2.8 をベースとした日本語版 Sakai を開発中である。

今回は日本語版 Sakai 開発を通したユーザインターフェイス（以下 UI）設計の事例を紹介する

2. 日本語版 Sakai 開発コンセプト

CEAS/Sakai 連携システムの基本である「授業支援型 UI」の考えを踏襲し、Sakai 利用スキルの浅い教員でも気軽に Sakai を活用して頂ける」を基本コンセプトとした。

「授業支援型 UI」はつぎの要件を満たす UI と定義されている。(1)

●各活動段階のユーザの活動と，それに必要な機能操作の集まりとが，UI で分かりやすく提供されていること

●一覧的な情報の提示があること

上記を踏まえの下記3点の実現を目指している。

◇課題（Assignments）、テスト（Tests&Quizzes）での1つ1つのコンテンツが授業に関連して「事前学習（予習）」なのか「理解確認（復習）」なのか「知識拡大（自己学習）」なのかといった目的が教員、学生で判ること。

◇授業に関連する学生の学習成果（課題の評価、テスト結果、出席状況、発言状況など）が鳥瞰できること。

◇各 Tool 利用にあたって、標準的な使い方に沿って、シンプルな機能やテンプレートを提供し、最低限の操作で利用できること。

3. 日本版 Sakai 開発における UI 設計事例

Sakai の多言語対応は、Ja-Sakai Community メンバーを中心に日本語リソースファイルの拡充、翻訳精度向上が精力的に進められている。(2)

今回は、言語変換のみでは吸収できない部分として UI に焦点を絞って設計の事例を紹介する。

（１）標準フローに沿った UI の設計事例

Tool 単位の独立性と拡張容易性から Tool 毎の UI には自由度がある中、利用スキルの浅い教員が混乱なく利用するには、シンプルな機能の提供が必要である。

今回は、Tool のトップページに、フローチャート型の画面を被せ、新規トップページからの下位ページ呼出は既存ページをそのまま利用、下位ページのアクションは一斉変更せずフォーム修正のみに止めた最小限のプログラム修正で以下のシンプルな UI を実現した。

・標準フローに従い、メニューからの１対１で関連する機能に遷移させ、機能間の相互遷移の複雑さを隠蔽した。

・ユーザで設定変更されたくない入力項目の隠蔽や既定値の自動設定により一貫性を確保した。

・バリエーションや高度な利用の設定事項を詳細設定として分離し、基本設定項目を判りやすくした。

（２）V－M 間の依存度の低い日付入力方式

Tool に利用されている代表的な日付入力方式として①カレンダーを利用したテキスト入力形式、②選択コントロールを切替える入力方式　が存在する。

①では、View 層から Model 層に渡される日付形式が異なり、Model 層にて locale による処理分岐が必要である。一方、②では HTML 生成時に locale による日付入力形式に応じたフォームを生成する為、Model 層での日付形式依存度が低くなっている。

本開発においては、②の方式を基本採用し、UI を見直す方針とした。

4. 今後の展望

今後、基本コンセプトとして述べたような日本の実態に合せた日本版 Sakai2.8 の開発を進めていく中、さらに多くの意見を取り入れて使い勝手の向上やポートフォリオテンプレートなどの充実を図るとともに、信頼性が高く導入が容易なクラウドでのサービス提供を行っていく予定である。

5. おわりに

更に知見の蓄積に努めていく必要はあるが、今後も諸課題への解決と、大学教育に真に役立つサービスの提供を目指し、日本における Sakai の一層の普及に継続して貢献していきたいと考えている。

参考文献

(1) 冬木正彦，“CEAS/Sakai 連携システムの利用環境と教育実践事例”，第 3 回 Ja Sakai カンファレンス，2010

(2) 吉田光男，“Sakai Community に対する Commercial Affiliate としての貢献”，法政大学情報メディア教育研究センター研究報告 Vol.25 特別号 2011 年